

臓器移植推進

街頭キャンペーン

第21回



十月七日、第二十一回臓器移植推進街頭キャンペーンが全国一斉に開催されました。北九州地区では、小倉東映会館前と黒崎藤田銀天街前で行なわれました。当日は、臓器提供意思表示カードと共に移植に対する説明書及び花の種が市民の皆さんに配布されました。

十二時からの開会式で、北九州市腎友会江頭博幸会長は、次のように述べました。
「現在、日本の透析人口は二十万人を突破しました。アメリカは二億の人口であるにもかかわらず、透析人口は一人で日本の十分の一にし過ぎません。イギリスでも、透析患者の五十パーセントは、移植を受けています。他の諸外国でも、透析医療は移植までの繋ぎです。
日本では、来年にも医療費が破綻するといわれています。」

無力症友の会」・「心臓病の子供を守る会」の二団体が参加していることを報告しました。参加人数は北九州全体で二百名以上になりました。
参加者は、患者自身、その家族、行政、医療関係者など多くの方々が参加されました。街頭キャンペーンに、さわやか五周年記念のVTR撮影のため、FVSのスタッフも参加しました。
第二十一回街頭キャンペーンは、一万三千枚のドナーカードを配布し、大きな成果をあげて十四時に終了しました。



今年花の種が一緒に配られました。

つぶやきコーナー

ボランティア
佐藤 俊 康

動が人に迷惑をかけているのを分かっていても叱ることなく黙って見ている親や笑いながら「だめよ」と言うだけの親が多いように思われてなりません。中には他人が注意すると、「おお怖い、おじちゃん」が怒るから、しては駄目よ」と言っていて注意した人を睨みつけ、子供の手を引いてさっさと行く親もいます。
約四十年前、小学生だった私は、人に迷惑をかけた人としてはいけない事などをする、親から目が飛び出るほど殴られたり、親に付き添われて迷惑をかけた相手のところまで謝りに行ったりした経験があり、現在考えると、このことが人に迷惑をかけてはいけないという躰だったと思います。また町内には、悪いことをすれば他人の子供でも自分の子と同じように叱ってくれる人がいて、「かみなりおやじ」と呼んでいた記憶があります。

最近、大型店舗とかデパートで、人ごみの中を走り回っている商品を手に取り中身をつぶしたりしている子供をよく見かけます。
これらの子供の近くには若いお母さんやおばあちゃんが付き添っており、子供の行

北九州市腎友会 総会を終えて

9月9日、菊の節句でもある日曜日に小倉北中央公民館にて、北九州市腎友会総会が行われました。

液済会の立石会長・岸本医院の笠野会長始め、五腎友会と難病連の代表が出席されました。はじめに北九州市腎友会の江頭会長と、福腎協の毛利会長よりあいさつがありました。

ひきつづき各事業所（通院介護センター「さわやか」・喫茶「やすらぎ」・「いきいき北九州」）の総会が行われ、経過報告、事業計画等、各事業所とも承認、承諾を得ました

「さわやか」からは、各腎友会のご協力でごここまでやってきましたが、まだまだ大半を健常者のボランティアさんに頼っています。会員でボランティアのできる方に参加していただくようお願いし、総会を終了しました。



透析病院紹介

はまゆう会 王子病院

院長 田中 孝夫 先生

四回目になりました病院紹介は、八幡西区にある、はまゆう会王子病院です。バス停や商店街が近くにあるわりには静かな所です。玄関両脇に病院の名前にもある浜木綿（はまゆう）の植え込みがありました。玄関を入りますと待合室と言うよりロビーのような雰囲気、膝や腰の悪い患者さんの事を考え、椅子にも工夫されていました。まず、王子病院医療ソーシャルワーカーの坂倉さんより院内を案内、説明をしていただきました。



患者数243人、日曜日を除いて、朝の透析と夜間の透析が毎日できます。透析室は2階・4階が8人～10人の透析室が5室ずつあります。4階には明るいフロアのオープン型の透析室になっていました。ベッドは半数がリクライニングの椅子型で気楽な透析という感じを受けました。また自立の為のリハビリにも力を入れられ、リハビリテーションクリニックを近くに開院されました。こちらの病院は次号にてご紹介の予定です。

院長の田中先生もお忙しい中、時間を割いて下さり、透析医療を目指された事、患者さんが「如何にすれば社会生活ができるか」を情熱的にお話していただきました。詳しくは「はまゆう会王子病院二十周年記念集」から引用させていただきました。また案内をして下さった坂倉ソーシャルワーカーご本人も病気の苦しさを知っている方で、患者さんに対する思いやり、きびしさ、心遣いが言葉の端々に感じられ、これほど患者の自立に力を入れている病院の対応にも逆に力づけられました。

はまゆう二十周年記念集より

私と透析医療 院長 田中 孝夫

私が透析医療と本格的な関わりを持つようになったのは、九大から産業医大へ赴任した昭和54年でした。丁度、麻酔科へ入局して10年目で、心肺蘇生法も含め呼吸・循環の管理にもそれなりの自信を持てるようになり、この他の領域での知識や技術を広げたいと願っていた矢先で、腎不全の治療には不可欠な透析療法にも自然と関心を持つようになっていました。

幸い、当時、市丸現理事長が八幡西区筒井町で黒崎クリニックを開設されており、毎週水曜日に年金病院へ麻酔の出張に行った帰りに、少しずつですが透析の勉強をさせてもらうようになりました。

最初は、急性期医療の典型のような麻酔にどっぷり浸っていましたが、極めて慢性的な透析療法には正直とまどいを感じ

プロフィール



田中 孝夫 院長

昭和20年生まれ 佐賀県出身

昭和45年 九州大学医学部卒業

同年 麻酔科入局

昭和52年 医学博士

同年 宮崎医科大学講師

昭和55年 産業医科大学助教授

平成5年8月

医療法人財団はまゆう会

王子病院院長。現在に至る。

ていました。しかし、当時は、まさか自分が将来透析医療に従事するなど夢にも思っていなかった訳で、純粋に勉強の幅を広げたいという位の気持ちでした。

その後、時が移り、昭和63年4月からは当院へ勤務するようになりました。そして、次第に患者さんとも馴染みになり、より多くの方々とも関わりを持つようになりますと透析医療の難しさも少しずつ感じられるようになりました。

まず第一に、透析医療が極めて長期的な療法であることです。移植手術でうまく透析を離脱できない限り、生涯この治療を続けていく必要がある訳です。そして長期になればなる程、透析療法以外の面でも関わりが生ずるようになってきました。勿論、こうした長い付き合いの中から、いろんなことを勉強させてもらったりもする訳ですが、全治退院といった場面を体験することが少ないのは、やはり医療者としては寂しい気もします。

次に、透析医療は全身的医療である点です。長期の透析ともなれば、骨・内分泌系・貧血・血圧・かゆみ・痛みなど、体のいろんな場所にいろんな症状も現れてきます。さらに患者さんの高齢化に伴い、いわゆる老人性疾患の合併も多くなってきます。

私どもも、他領域の専門の先生がたの協力を得て、日頃よりそれなりに頑張っているつもりですが、今後共さらなる努力が要求されるでしょう。

最後は、透析療法が長期的なものであるが故に、ご家族の皆様のご協力がぜひ必要な点です。

前述のごとく患者さんの高齢化が進むにつれ、自己通院もできにくくなるケースも増えています。ご本人は元より、ご家族にとっても大変なことではありますが、ぜひ乗り越えて行って欲しいと願っています。



ソーシャルワーカーの坂倉さん（前列一番右）の一言「コメントなんてとんでもない。がんばっている患者さんから教えられる事の方が多いです」とのお話でした。